

テーマ4 異文化との出会い

問題一二 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

(1) 水族館の比喩

水族館を思い出してみてください。そこにはさまざまな熱帯魚から、甲殻類、サメのような軟骨魚類、さらにはジユゴンやイルカやシャチや、アシカやクジラといった哺乳類までが、自然の生態系を復元したり模倣したりした環境のなかで、飼育され、我々の目を楽しませてくれます。子供たちは魚類や動物たちの名前を覚えるのが得意ですから、次々と気に入ったものを暗記してゆきます。やがて分類学を学ぶようになれば、系統樹に沿って、5
どの魚がどの仲間なのか、親戚なのかといった知識も身につけ、またこれはアマゾンの汽
水にのみ生息する肺魚の類い、あれは、乾季で干上がる前にニジェール川で産卵する魚、
といった判別もできるようになってゆきます。名前だけでなく、個々の魚の生態や習性も、
知識として習得されてゆくわけです。読者の皆さんのなかにも、世界中の主な魚たちの分
布と生活誌を、そのまま暗記してそらんじてみせるちびっこ魚類学者だった人が、何人も
いることでしょう。ことはサカナに限りませんが、普通、そうして知識を獲得する営みが、
「勉強」といわれます。

異文化理解といった題目で、あるいは比較文化という科目で、とりわけ大学の初期教育
でなされている教育のほとんどは、こうした魚類学初歩のお勉強とさして異なっていませ
ん。ちょうど水族館のガラスごしに、優雅な身のこなしを見せる魚たちを眺め、その名前

と図鑑にある知識を頭に詰め込み、やがて期末テストとなれば、魚なり文化圏なりについての固有名詞や術語の穴埋め試験を受け、それで及第となれば、異文化を「理解」できたことになってしまいます。テレビ放映で、タレントと称する若者たちが体験した異文化紀行をクイズにした番組が、人気を得ています。それを見て、クイズの答えが当たった、外れた、と我々視聴者ははしゃぎますが、大学での穴埋め問題のペーパー・テストも、これとそんなに変わりません。そうした異文化との付き合い方は、いわばガラス越しに（ブラウン管も、ひとつのガラスです）、安全が確保された情報を一方的に受け取る営み、という枠組みにはめられています。

それでは、現実を直接知る、というのはどういうことでしょうか。水族館の例でいえば、ガラスのこちら側に止まることをやめて、向こう側に行ってみることになりますが、それでは、というので、エイ、とばかりにガラスを割ってしまっただけでは、皆さんただけではなく、魚たちにとっても、大変な惨事になってしまいます（巨大な水槽から流れ出てくる水圧が、どれほどの大きさか、高校で学んだ物理学で簡単に数値はでてくるでしょう。でもその力を実際に体で知っているか否かは別問題です）。防御ガラスは、サカナたちの生きている現実には直接触れるのには邪魔にもなるけれど、観察という枠組みを支えていてくれる安全弁でもあれば、サカナとヒトの双方の安全を確保する隔壁でもあるわけです。両者を隔てる壁はたしかに存在するわけですが、性急にその壁をとっばらってしまうと、それで両者が理解しあえるわけではありません。

ガラスを割るかわりに、何ができるでしょうか。わたしは大学に入学した年の学生諸君に、水族館でアルバイトをしてごらん、とよく勧めます。もちろんプロとして働くのとは 35

雲泥の差ですが、水族館のガラスを普段とは反対側の内側からのぞき、そのガラスを透明に保ち、水槽の環境を維持するために、どれだけ大変な手間と労力が掛けられているのかわかることは、決して無意味ではないでしょう。観客の側から見ているかぎり見えてこなかったさまざまな仕組みが、そこで初めて視野に入ってきます。同じ魚でも、ガラス越しに観察するのと、実際にエサをやりフンを掃除し、生き物として彼らを生育させる側に立つてみるのでは、見え方が大きく違ってきます。わたしたちは日常、現場を裏から支えているこうした人々の姿を知らず、あまりに身勝手なお客さんの立場ばかり世の中と付き合うことに、ひよつとしたら慣れ過ぎていてのではないか。そんな反省も生れてくるかも知れません。比較文化論の出発点は、そんなところにも転がっているようです。

(2) 十人十色

「比較文化」や「異文化理解」といったからといって、外国に目を向けねばならないわけではありません。むしろ水族館の観客を演じ続けているかぎり、そして観客の目しかもたないかぎり、どんなに世界中の文化のことに詳しくなっても、その見方は、あまりに一面的なものに止まってしまいます。複眼の思考という言い方もありますが、それは（昆虫の複眼ではなく、双眼によるステレオ視覚の意味で）普通、左右の目の把握した物体の映像相互のひずみから、もとの物体の距離と形状を立体的に復元して把握することの比喻です。ここではそれを、同一の事態を外と内から同時に見比べてみる、というような意味にずらしてみましよう（ウチとソトという区別そのものや、それが意味するところも、それぞれの文化圏によって、異なっているはずです）。また光学のフィルターの比喻を使うな

ら、衛星からとった同じ地球の映像でも、そこに紫外線、赤外線、そのほか特殊なフィルターを掛けて見ると、全く異なった姿が現れることもご存じでしょう。色眼鏡という言葉もあって、色眼鏡を掛けて人を判断してはいけない、などと言いますが、そもそも我々の目が色眼鏡から自由だとは、誰に判断できるのでしょうか。日本人だったら、日本のことは色眼鏡なしに判断できるのでしょうか。外国人は色眼鏡から自由ではないのでしょうか。むしろ、誰しもが何らかの色眼鏡を掛けてものを見ていることを知り、自分もまたそのひとりであることに気づくところから始めるべきなのかもしれません*（ユクスキユルは虫には虫にしか見えない環境世界―虫眼鏡?―がある、と主張しました）。我々の住む世界は地球はあくまで共通なのに、それを見るにはさまざまな色眼鏡があつて、どれを選ぶかによって世の中の見え方も違う。レンゲの花ひとつとっても、ミツバチには、けつして我々が鑑賞するような姿では、レンゲは見えていない。とすれば世の中には、ひとつの出来事についても、複数の見方があるのは当然だ。だが、それなら何が正しく、何が間違っているのだろうか。そんな素朴な疑問から始めてはどうでしょうか。

高等学校修了まで、ほとんどの仲間が日本国籍であり、日本語を話し、日本の教育制度を当然のものとして受け入れ、またそのことを当然とする両親や先生方に接してきた、日本人。こうした「日本人」は、上のような「見え方の違い」に対する心の準備ができておらず、あるいは異質な正誤・価値判断に対する許容範囲も狭く設定されているのかもしれない。また常識を疑うことは教えられず、ひたすら常識とされている価値観を無反省に咀嚼そじやくすることばかりが、「勉強」の名のもとになされてきました。それに漠然とは反発しつつも、しかし具体的にはどのようにに対抗し、抵抗すればよいのかわからないまま周囲か

らそれが当然だ、といわれるままに、塾に通い、高等学校を出て大学に来てしまった、と
いうのが大多数の「日本」の大学生の実態ではないでしょうか。しかし、そうした惰性だ
けでは乗り越えられない差し迫った課題のひとつが、「異文化理解」と名付けられた問題
には含まれているようです。

(稲賀繁美編著『異文化理解の倫理にむけて』(名古屋大学出版会、二〇〇〇年)、序章「ナウシカ
の慰め」より抜粋し、一部表記を改めた。)

*出題者注…ヤーコブ・フォン・ユクスキユル。ドイツの動物行動学者。一九三四年の『生物か
ら見た世界』(ゲオルグ・クリサートと共著)でそれぞれの動物はそれぞれ独自の環
境を持つとして、ハエの見た世界や犬の見た世界などを示し、環境世界論を提唱し
た。

問一 「水族館の比喩」とは何か。本文の内、前半の(1)の部分全体に即して説明しなさい。
(二五〇字以内)

問二 異文化を理解することの問題点と理解の仕方に関する筆者の見解を要約し、それに
対する自分の意見を具体的に述べなさい。(四五〇字以内)